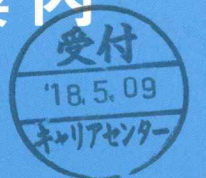




THE CHUGOKU SHIMBUN

会社案内



社長メッセージ

新聞人。新聞発行に携わる私たちは、自らをこう呼びます。「社会の公器」として信頼される新聞の責務を果たすことに、誇りと戒めを込めた言葉です。

新聞に何ができるか、想像してみてください。まずはニュースです。日々、自分たちが住む町や国、世界の動きを見つめ、いち早く、正確に報道していく。とりわけ公正な社会を実現するため、権力を監視する大きな役割があります。取材で中山間地域を駆け回っている記者は「毎日、地域の日記を書いている気がする」と話します。こうして完成した新聞は、販売所から毎朝、確実に読者のみなさんに届けられます。本紙やウェブには、記事のほか、暮らしに役立つ広告情報も満載です。スポーツや文化関係の主催イベントも多彩に展開し、豊かな地域づくりに貢献しています。

中国新聞は1892(明治25)年5月5日、広島で「不偏不党」「自主独立」「地域主義」を掲げて誕生し、中国地方を舞台に育ちました。人類史上初の原爆投下では、社員の約三分の一に当たる114人の尊い命と本社屋を失いました。それでも先輩たちは新聞人の使命を失わず、不屈の精神で疎開先の輪転機を回したのです。これまで①被爆地から世界に平和を伝える②暴力から市民の安全を守る③中国山地や瀬戸内海をテーマに人々の営みを見つめる—など特徴ある報道を続けています。より良い紙面づくりが古里の明日をつくる。これが、私たちの信念です。

2017年、本紙は創刊125年を迎えました。「フェイク(偽のニュース)と戦う新聞」をテーマに第70回新聞大会が広島で開かれ、参加社は「正確で公平な情報を提供し、ジャーナリズムの公平性を果たす」ことを誓い合いました。核兵器廃絶に向けて活動するNGO組織「ICAN」のノーベル平和賞受賞、広島東洋カープのセ・リーグ連覇という喜びのニュースも届けました。本紙は今後いっそう、人々の声に耳を傾け、時代や顧客のニーズをつかみ、的確に伝える新聞力を磨いていきます。「このまちで暮らすなら 中国新聞」。読者の信頼に全力で応える覚悟です。

本社の目指す姿は、新聞を基軸にした総合メディア企業です。スマートフォンやケーブルテレビなどの多メディアへニュースを発信しています。ホームページと電子版を融合した「中国新聞アルファ」やSNSなどの情報サービスも充実させています。紙媒体も負けてはいません。2015年に創刊し、新聞協会賞(経営・業務部門)を受賞した「中国新聞SELECT」は、「もう一つの朝刊」として知的好奇心の旺盛な読者に大好評いただいております。

- ・ 地域が好き、人間が好き、書くことが好きな人
- ・ 鳥の目、虫の目を併せ持ち、しなやかに考え、誠実に動ける人

多メディア時代にあって、私たちは以上のような仲間を求めます。個性あふれる人たちが作る豊かな紙面こそ、時代に支持されるコンテンツとサービスになると信じるからです。

私たちは新聞が好きです。新聞づくりを通じて、平和の実現や地域社会の発展に貢献しようと志を立てた集団です。ともに「中国新聞」の題字を担う、頼もしい新聞人の出現を願っています。



代表取締役社長 岡谷義則

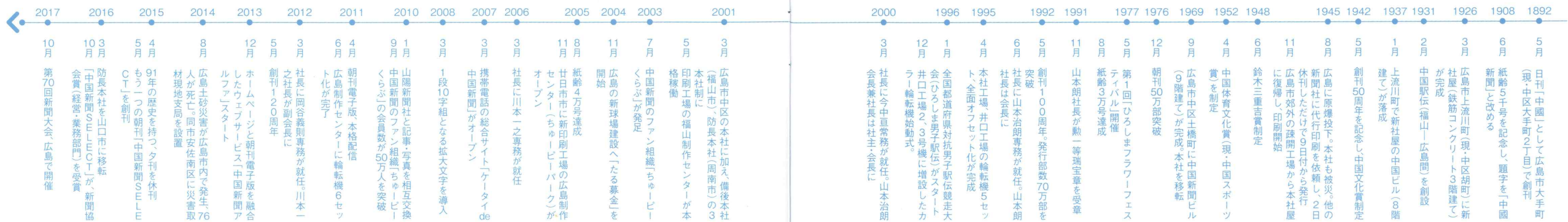
いつでも
どこでも
だれでも
中国新聞

- 地域と読者に寄り添い、いつも身近な存在であり続けます
- 新聞力を高め、情報の双方向化を促進します
- 時代のうねりを敏感につかみ、多メディア展開を加速させます

INDEX

企業指針.....1
 社長メッセージ.....2
 新入社員に聞いてみました.....3
 新聞制作の流れ.....5
 中国新聞の特長/主な受賞歴.....6
 Hot Voice.....7
 多彩な事業・サービス.....9
 ネットワーク/会社概要.....10

中国新聞の歩み ~History of THE CHUGOKU SHIMBUN~



新入社員に 聞いてみました

先輩たちはどんな人？ 2017年に入社した15人のうち、編集・販売・広告部門で働く4人に、入社後の仕事や就活生へのアドバイスを聞いてみました。(2018年2月現在)



事件の背景探り 地元の問題提起

編集局・報道部
菅田 直人

Q どんな仕事をしていますか

編集局で報道部・遊軍→記事審査→報道部・県警に所属し、基本を学びました。遊軍では、街の話題や季節の移り変わり取材します。ひろしま美術館で子育てを始めたカルガモなど、ほのぼのとするニュースを届けました。記事審査では、新聞独自の用字・用語が載ったハンドブックを手に、誤字・脱字や文章内に矛盾がないかなどをチェックしました。

県警チームでは、広島駅のすぐ西にある飲食店街の火災に遭遇。店舗など19軒が焼け、高齢の女性が1人亡くなった大火事でした。被災した住民や店主に話を聞くのは心苦しい取材です。知り合い同士の飲食店主が、被災した方の酒を代理販売している話を聞き、支え合う姿を記事にしました。また、繁華街である流川地区で、違法な客引き行為が横行している情報をつかみ、先輩と客引きの動きを観察することに。警察に間違われたりしながらも、記事を書けたことが印象的です。

Q なぜ中国新聞社に

社会で何かが起こっている現場に立ち、自分の目で見て知りたかったからです。

Q 趣味・特技は

剣道、茶道、映画や漫画。

Q 新聞社でやってみたいこと

事件・事故や火事、社会問題の背景を追求し、問題提起ができるような記事。地域の人や風土など、地元紙だからこそ伝えられるものを探りたいです。

Q 先輩や社の雰囲気は

面白くて面倒見のいい先輩が多いです。休日は先輩の船で釣りに連れてってもらったり、みんなでスポーツをしたりしています。

Q 就活生の皆さんへ、アドバイスを

会社の規模にこだわらず、実際に足を運んでみるのが大切です。受験するうちに、各社の雰囲気が分かり、志望が絞られました。

Q どんな仕事をしていますか

広島県警・佐伯署→広島市政→記事審査を担当しました。3カ月間は、校閲ガールにもなりました。県警では、警察の発表資料などを基に、記事にならなくても「事実を再現できるまで、詳細に聞く」ことに驚きました。正確な記事を書き、ニュースの元になる異変に気付くためでした。市政では、原爆平和関連の取材に携わりました。広島から世界へ発信する高校生や「自分たちにできる平和」を主題に意見を交わす小学生を取材。被爆地の新聞社の一員として、伝える責任を痛感しました。

Q なぜ中国新聞社に

中国新聞の連載「中国山地」を読み、「中山間地域のいまを追う仕事ができる」と記者に憧れました。

Q 趣味・特技は

温泉めぐり、散歩。

Q 先輩や社の雰囲気は

先輩は優しく、丁寧です。かつて担当した地域に愛着を持つ方も多いです。

Q 働いてみて嬉しかったこと

広島市佐伯区の半身まひの男性が、リハビリを兼ねて作った木工のおもちゃを地元の公民館に貸し出している話を取材しました。おもちゃで遊ぶ子どもたちの親ごさんに、制作者の思いを伝えながら話を聞くと「知らなかった」「もっと大切にして、長く遊ばせたい」などの声が返ってきました。地域の人の輪を広げる一助になればと考え、執筆しました。掲載後、男性から「知人から連絡がたくさん来た。ヒーローになったみたいだ」。こちらも嬉しくなりました。

Q 就活生の皆さんへ、アドバイスを

着飾った言葉より、素直な気持ちを形にする方が伝わります。就活では「自分の興味は何か」「どんな風に生きたいか」を考え、志望する会社で働く人の考えを知ることによって多くの時間を使いました。



丁寧な取材 記事がつながる人と人

編集局・報道部
三宅 瞳



新聞は「人生の記念」 増やす知恵絞る

販売局・販売部
石井 航平

Q どんな仕事をしていますか

地域の販売所と本社をつなぐ担当です。私は助務として先輩担当員について回り、仕事を教わっています。広島市東部の18店と、安芸高田市などの16店を担当。販売所長たちと一緒に販促企画を考えます。皆さんの自宅に毎朝お届けする「戸別配達網」を維持するため、汗を流しています。印象深い出来事は、広島東洋カープのリーグ連覇です。近づくにつれて社内に緊張感が高まり、優勝当夜は広島市中心部で、号外を配布。押し寄せるファンにもみくちゃにされながら、喜びを分かち合いました。

Q なぜ中国新聞社に

進学で広島を離れてみて、地元で貢献したいという気持ちが強くなりました。新聞は人々の生活に寄り添って存在する商品です。新聞を多くの方に読んでもらうことで、地域の発展に役買いたい、と応募しました。

Q 趣味・特技は

カープやサンフレッチェ広島などのスポーツ観戦。地元球団が試合に勝つと、翌日の朝刊スポーツ面が楽しみになります。

Q 先輩や社の雰囲気は

オンとオフの切り替えがしっかりしている職場です。普段は和やかな雰囲気ですが、仕事ではスイッチが入って引き締まります。困ったときはすぐ相談に乗ってもらえ、新しいことに挑戦しやすい環境だと感じます。

Q 働いてみて嬉しかったこと

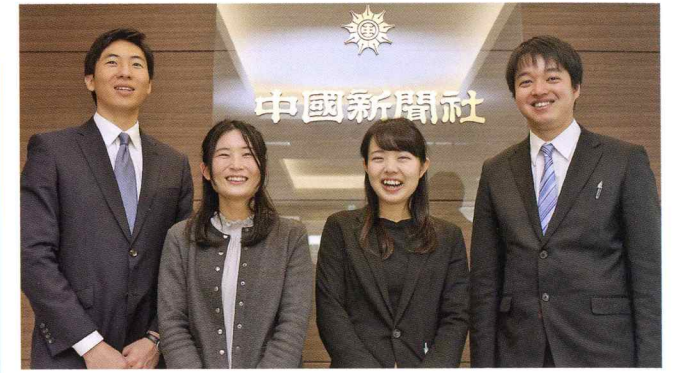
安芸高田市で、本社主催のグラウンドゴルフ大会を実施しました。所長さんと協力し、特産のゆずジュースや、本紙キャラクター「ちゅーピー」のもみじまんじゅうを賞品に選定。約200人に本紙をPRしました。カープの優勝パレードでの手旗配布など、地域への働きかけを通じ、多くの笑顔に出会えました。新聞は「人生の記念」となる商品。皆さんの喜びをさらに増やせるよう、知恵を絞ります。

Q 新聞社でやってみたいこと

「新聞は難しい」というイメージを変え、若者と新聞との接点を増やしていきたいです。

Q 就活生の皆さんへ、アドバイスを

新聞をめくってみましょう。学生が知らない地域情報や話題に出会えます。多様な考え方や情報をインプットすれば、志望企業について多角的に見る力が付きます。中国経済面の「採用担当コーナー」(火曜日)をスクラップすれば、就活のマイ参考書ができますよ!



Q どんな仕事をしていますか

広告局(現在の地域ビジネス局)では流通・金融・飲料の3分野を担当しました。紙面広告とグッズ制作、イベント企画を通じて、企業のニーズと地域の皆さんを結びつける役割です。2017年は中国新聞の創刊125周年。記念企画として広島出身のタレント、ゆうたろうさんを起用した「広島人拡大作戦」を展開しました。スポーツ王国、教育県、子育て…広島の長所をPRする、ツイッターとも連動した取り組みでした。広島東洋カープのキャッチフレーズ「カ舞吼」にちなんだ飲料イベント、紙屋町・八丁堀エリアの回遊を促進するスタンプラリー。カープ人気と、それだけではない広島の魅力を引き出せるよう、努めています。

Q なぜ中国新聞社に

小学2年から13年間「ひろしまフラワーフェスティバル」に出演した経験から、長く愛される、広島を象徴するイベントに関わりたかったと願っていました。大学で学んだデザインやアイデア、新技術を広告部門で活かそう、とも感じました。

Q 働いてみて嬉しかったこと

先輩や広告会社のおかげですが、新春の祝賀広告の数を増やす挑戦をした結果、はみ出るほどの出稿がありました。挑む姿勢の大切さを感じました。携った健康サポートフェア、グルメフェスタ、ちゅーピーまつり(本紙のファン感謝祭)では、若い世代の姿も多くみられました。紙面、SNS、異世代がクロスオーバーできる新聞の影響力を、多くの方に伝えたいです。

Q 趣味・特技は

バントワリングとダンスです。

Q 就活生の皆さんへ、アドバイスを

就活をきっかけに、新聞を読み始めました。一面のコラム「天風録」や社会面、地方版から、社会の変化や人々の心の動きの速さを感じ、気分を切り替えました。今は、中国経済面から読んでいます。就活では、関心のあるニュースについて聞かれる場面も多いです。電子版「中国新聞アルファ」は、スマートフォンのアプリで手軽に読めるので、最新情報をチェックしてください。

広島の魅力引き出す 広告を企画

広告局(現・地域ビジネス局 営業部)
柳川 寿々花



新聞制作の流れ

より早くより確実に。毎朝届く新聞は、多くの部署が連携して作り上げていきます。

1 取材・出稿

取材ノートに基づき記事を書き、デスクに出稿します。



2 整理

ニュースの価値を判断し、的確な見出しを付けて記事をレイアウトします。

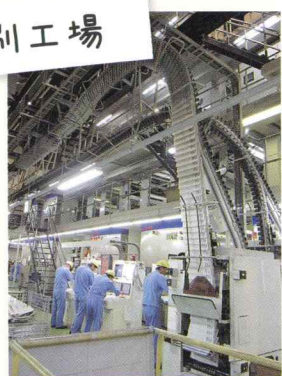


3 紙面編集

新聞紙に印刷するため、記事と広告を合わせた一つの面としてデータ化し、印刷工場に送信します。新聞紙に印刷した時、一番美しく見えるよう、写真などの色調整も行います。

4 印刷工場

国内有数の規模を誇る廿日市市の広島制作センターと、福山市の福山制作センターの2カ所あります。環境に配慮し、見学もできる読者とのふれあいの拠点です。



5 販売所

中国地方に約440店あり、朝刊、中国新聞SELECTの配達や集金業務を担っています。ミニコミ誌を発行したり、地域イベントを開いたり。信頼される店づくりに励んでいます。



読者にさまざまな生活情報を届けます。広告主や広告会社に広告を提案する営業部門と広告を紙面に割り付ける編成部門があり、情報紙やウェブでも発信します。

広告

中国新聞の特長

中国新聞SELECT

新媒体「中国新聞SELECT」を2015年、創刊しました。本紙とは一味違う視点と感性で、国内外のニュースや話題を厳選(セレクト)します。16ページ、フルカラー。国際・経済情報から、趣味・スポーツ、地方紙の人気企画まで。コンテンツを満載した「もう一つの朝刊」です。

2016年新聞協会賞受賞



もう一つの朝刊「中国新聞SELECT」は紙媒体の新たな可能性を広げる

中国山地・瀬戸内海

海と山。中国地方の二つの顔は、日本の地方の縮図であり、半世紀以上にわたる本紙の伝統的なテーマです。2017年の重点企画「海に聞く 瀬戸内再生」は、「富栄養」から「貧栄養」へと転じた瀬戸内海の現状を紹介。豊かな海を取り戻そうとする人々の奮闘を伝えました。「中国山地」(2016年)、写真企画「命のゆりかご」(2012年)、「ムラは問う」(2008年)などの連載は、私たちが暮らす里山里山の自然環境、生活や産業の変化から普遍性のある課題を掘り起こし、共感と議論を呼んでいます。故郷を歩き、ニュースを刻み、明日へのヒントを探る。地方紙の大切な役割の一つです。

原爆・平和

人類史上初の被爆地の新聞社として、「あの日」と、核廃絶を願う声を世界に伝え続けています。「世界のヒバクシャ」「伝えるヒロシマ」など核被害を幅広く捉えた連載も展開。被爆者の高齢化が進む中、「ヒロシマ平和メディアセンター」は、紙面では中高生のジュニアライターが被爆体験を聴く連載「記憶を受け継ぐ」など、ヒロシマ学習に生かせるよう充実に努め、ウェブサイトでは核・平和問題のニュースや連載、論評を5言語(日、英、中、仏、露)で発信しています。

ジュニアライターたち



被爆翌日の中国新聞本社(岸田真宜さん撮影、孫の岸田哲平さん提供)

暴力から市民を守る

不当な暴力が市民を傷つけることは許さない。中国新聞の一貫した暴力追放キャンペーンは現在に続きます。1965年には、組織暴力へのゆるがぬ報道姿勢に対し「菊池寛賞」が贈られました。この伝統は「断ち切れ 暴走の連鎖」キャンペーン(新聞協会賞受賞)や、「安心・安全結びプロジェクト」など、親子や地域の絆、暮らしを守る企画に発展しています。



研修&社内制度

社員一人一人の成長が組織、グループの成長につながるとして、さまざまな研修や支援制度を用意しています。

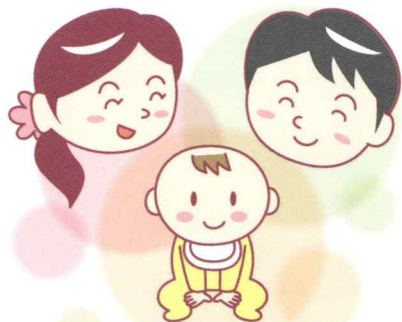
研修

- 入社前 内定者8・6研修
- 同期で受けるキャリア研修
入社時 → 半年 → 3年目 → 7年目 → 13年目
- 職能別の研修
中堅社員、新任管理職、管理職
- 各局で受ける研修
記者研修、販売研修、デスクキャップ研修
- 中国新聞グループ研修
健康セミナー、メンタルヘルス研修

※このほか、仕事で生かせる学業や留学、資格取得を応援する制度もあります。

子育て支援

- 育児休業
男性社員も取得しています
- 育児短時間勤務制度
- 育児在宅勤務制度



◆地元スポーツを熱く

広島東洋カープ、サンフレッチェ広島の報道は質量ともに、日本一を誇ります。カープ担当記者のコラム「球炎」や読み物は愛情と辛口批評を織り交ぜ、読者から共感の声が寄せられています。サンフレッチェの情報も充実。監督の戦術や選手の調子を担当記者が密着取材し、試合のない日も話題を届けます。アマスポーツも幅広く取材しています。

◆地域経済を多角的に

地場企業の動きを連日、多角的にとらえて紹介しています。中国経済面は新規事業や商品開発、決算、人事を網羅。ビジネスパーソン必読のページです。経営者の事業にける思いを伝える「ひとネット」、タイムリーな連載企画など、地方経済の躍動を多彩に描きます。

◆読み応えある地域ニュース

地方紙の真骨頂は地域ニュースの豊かさにあります。行政の動きや選挙報道、町の話。社会状況を反映した事件・事故。支局の記者はニュースの背景まで、丁寧に取材を重ねます。地方版や社会面を彩る連載・企画はその結晶。地方版は地域に沿って面を組み替えます。あなたの住む町にぴったりの紙面構成が自慢です。

主な受賞歴

●新聞協会賞 (計14回)

<編集部門>

- 1959年 連載企画「瀬戸内海」
- 1965年 原爆報道「ヒロシマ20年」など一連の企画
- 1985年 「段原の700人」「アキバ記者」など「ヒロシマ40年」報道
- 1986年 連載企画「シベリア抑留」
- 1990年 連載企画「世界のヒバクシャ」
- 1995年 「ヒロシマ50年」報道 特集「検証ヒロシマ1945-1995」連載「核と人間」など
- 1999年 特集連載「であいしまなみ」
- 2002年 「断ち切れ 暴走の連鎖」キャンペーン
- 2012年 連載写真企画「命のゆりかご」

<経営・業務部門>

- 1986年 「地域情報ネットワークの展開」
- 1987年 「ひろしまフラワーフェスティバルの創造と展開」
- 1992年 「エリアデータベースの構築と活用～情報新時代の販売所経営」
- 2009年 「夢のボールパーク誕生サポーター地域とともに歩む総合メディア企業の実践」
- 2016年 中国新聞SELECTの創刊～新たな活字メディア戦略に挑む

●新聞広告賞 (計11回)

- 1981年 広島市政令指定都市昇格記念シリーズ「ひろしまのあなたは幸せだろうか」
- 2009年 緑の伝言プロジェクト「緑の伝言2008」
- 2014年 AR広告のシリーズ企画「REAL舞HIROSHIMA」など

●農業ジャーナリスト賞 (計5回)

- 1986年 「新中国山地」
- 2008年 「ムラは問う」など
- 2017年 「中国山地」

●ミズノ・スポーツライター賞 (計2回)

●科学ジャーナリスト賞

- 2015年 連載「廃炉の世紀」
- 2017年 大賞 連載「グレーゾーン 低線量被曝の影響」

●その他の主な賞

- 1965年 「菊池寛賞」 組織暴力根絶への着実、勇敢な報道
- 1995年度 「ボーン・上田記念国際記者賞」 田城明記者
- 2003年 「日本記者クラブ賞」 田城明記者 一連の核問題報道
- 2013年 「第32回ファイザー医学記事賞」大賞 連載「最期の迎え方」



運動部 山本 修 (2000年入社)

広島東洋カーブの担当記者歴は12年目を迎えた。はじめは2002～04年の3年間で、チームは長期低迷の真っただ中。先輩たちが書くスポーツ面コラム「球炎」は、総じて辛口だったと記憶する。

駅伝などのアマチュアスポーツ取材し、08年の北京五輪では現地で中国地方出身アスリートの活躍を追った。10年にカーブ担当へ戻ると、時代は徐々に、確実に変わった。「球炎」を書き始めて5年目の16年、カーブは四半世紀ぶりにセ・リーグ制覇。激励を込めてつづってきた辛口コラムは、涙が隠し味の「胸上げ記事」となった。

公式戦や春秋のキャンプなど、全国各地を飛び回ってナインを密着取材。連覇、日本一、そして赤ヘル黄金期の再来へー。その難しさを考えれば、批判精神をふんだんに盛り込む「球炎」の味付けは、不変の辛口ベースである。



報道部 菊本 孟 (2006年入社)

夜明け前の午前6時半ごろ、警察官に付き添われた事件の容疑者が自宅から姿を現した。「来た」。数秒間、同僚のカメラマンとシャッターを切る。約半年前から追ってきた事件が大きく動いた瞬間だった。

広島県警本部刑事部や広島地検を担当し、県内の事件事故と向き合っている。中四国地方最大の都市広島を抱え、殺人や大規模火災、汚職など重大事件も多い。同僚とチームプレーで取材を進める。常に意識するのは事件事故の背景だ。核心に迫るには、事件の端緒をいち早くつかみ、しっかりと準備することが大切だ。

そのために、事件記者は現場や関係者のもとに足しげく通う。チームで積み上げた努力が紙面を飾った時の達成感がやりがいの一つだ。「何歳になってもフットワークだけは軽く」。駆け出しの頃の先輩記者の言葉を胸に刻んでいる。



備後本社編集部 福田 彩乃 (2014年入社)

「あつ、福田さん」。街を歩いていると、声を掛けてもらえることが増えた。相手の笑顔に、思わず顔がほころぶ。備後本社に赴任して3年。何度も話を聞き、足を運ぶうち、取材で出会った人が「見知った顔」になっていく。

備後本社が立つ福山市は、約47万人が暮らす中核市であり、豊かな自然と歴史を擁する。取材の場も、活性化が問われるJR福山駅前から、江戸期の風情薫る鞆の浦まで幅広い。過疎で荒れた畑を6年かけ、レモン畑に再生させた女性がいた。大勢で温かい食事を取る場を提供する「子ども食堂」は、中国地方に広がりを見せる。奮闘する住民の思いを紙面で紹介できる日々、やりがいを感じている。

忘れてはならないのは、人々の奔走の影にある課題だ。少子高齢化や貧困、行政の不手際…。地域が何に困り、何を必要としているのか。答えは何気ない一言にあるかもしれない。街の声を傾け、寄り添える記者でありたい。



整理部 杉原 和磨 (2001年入社)

国内外から次々と届くニュースを、紙面という器に盛り付けるのが整理部の仕事だ。掲載するそれぞれの記事に見出しを付け、担当のページ全体をレイアウトする。読者は、見出しやレイアウトを材料に、その記事を読むかどうか判断することもある。整理の仕事に責任とやりがいを強く感じている。

2016年は、特に中国新聞にとって大きなニュースが相次いだ年になった。オバマ氏の広島訪問、リオ五輪での地元選手の活躍、広島東洋カーブ25年ぶりのリーグ優勝など。「紙面にヒロシマの声を」「この写真はできる限り大きくしよう」「見出しをカーブ色で」。締め切り時間ぎりぎりまで知恵を出し合い、整理部一丸となっていずれのニュースも熱く手厚く報じることができた。

「中国新聞を読んで良かった」。そう思ってもらえる紙面を日々追い求め、今日も新たなニュースと向き合っている。

Hot Voice



システム・技術管理部 碓井 浩介 (2009年入社)

新聞社の技術部門と聞いて、真っ先に思い浮かぶのは印刷工場だろう。このほかに記事を書き、紙面を作り、工場で印刷するまでの全工程を連携させた大規模なシステムがある。この構築・保守・管理を担うのが、技術部門だ。

システム支援チームは、編集記者やカメラマンのサポートがメイン業務。記者の締め切りはタイトだ。彼らがスムーズに記事や写真を送信するために、専用ソフトを組み込んだ「記者パソコン」を開発。技術支援も行っている。

今日は機材を抱えてマツダスタジアムへ。選挙やスポーツなどの現場に向き、通信機器などを配備する取材拠点の設営も、僕たちの役目だ。使う人の立場に立ち、現場の声に注意を払うことにしている。新聞制作において技術者の持つ役割は大きい。どんなにいい記事が書けても、システム障害があれば新聞は発行できなくなる。読者に毎日、確実に紙面を届けるために、一丸となって力を尽くしている。



営業部 山本 勇貴 (2007年入社)

新聞広告の最前線として、大型広告キャンペーンを展開している。HIROSHIMA飲酒運転ゼロプロジェクトは「広島から飲酒運転をなくそう」という遺族の願いを基に、紙面などで飲酒運転が引き起こす悲劇と防ぐ決意を訴えてきた。さらに、元広島東洋カーブの前田智徳氏を「ゼロの応援団長」に起用。公共性の高いテーマに多くの企業・団体が賛同している。前田氏も身に着ける青のリストバンドは、全国の希望者へ10万本を届けた。

また、広島、愛媛の両県で開催された「しまのわ2014」では、大型グルメイベントを企画した。旧広島市民球場跡地に2日間で約2万7000人の笑顔が集まった。

広告主と読者(消費者)をつなぐ視点からアイデアを提案し、広告やイベントという形にする。扱うテーマは流通、住宅、車両、教育、プロスポーツ、グルメなど幅広い。入社1年目から担当を持ち、企画もできる。私たちと一緒に、全力で、地域を盛り上げる広告企画を作っていきましょう。



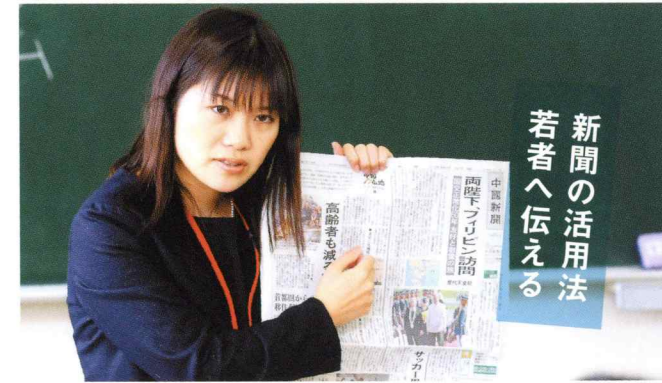
販売部 中川 洸一 (2013年入社)

中国新聞のファンを増やし、読者を増やす。地域密着をアピールして、この永遠のテーマに挑んでいる。

販売の仕事は、地域に根差した販売所との信頼関係が欠かせない。実際に読者の前に立つのも、配達をするのも販売所。販売所と協力して、あれやこれやと策を練る。

最近担当したのは広島と比べ、販売環境の厳しい山口県中・西部。まずは「山口の郷土紙」として、中国新聞に興味を持ってもらうことが重要だった。周南市では、販売所とともに徳山動物園での写生大会を開催し、優秀作品や入賞者の名前を紙面に掲載する。毎年600人以上の児童に中国新聞に触れてもらい、つながりを深めている。

カーブ熱は、山口県内でも想像以上に広がっている。「カーブのことなら中国新聞」を猛アピールしたい。また、サッカーではJ2レノファ山口があり、スポーツファンは多い。ひとりでも多くの山口県民に中国新聞を手にしてもらう。チャンスはいくらでも作れるはずだ。



読者広報部 赤江 裕紀 (2004年入社)

読者広報部の仕事は、広報宣伝や読者対応、世論調査など多岐にわたる。ここで、「教育と新聞推進チーム」の一員として学校への出前授業や小中学生向け新聞教室、みんなの新聞コンクールの運営などを担当している。

「新聞って、難しそう」。若い世代の新聞離れが進む今、新聞のおもしろさや活用法をもっと学校や家庭、若者へ伝える工夫が必要だ。「教育チーム」で新聞読み方講座や取材体験会を開き、記者時代の経験を生かして新聞の魅力を伝えるよう努めている。

社内ではワーキングマザーが増えてきた。私も2児の母であり、短時間勤務制度を利用して奮闘中だ。出会った子たちの笑顔と成長が楽しみの一つ。記事をうまく書けるようになったり、投稿が紙面に載ったりした時は、わが子のようにうれしい。職場や家族の協力を得て、日々乗り切っている。

多彩な事業・サービス

市民のまつりからスポーツ、絵画展や音楽、舞台芸能、囲碁・将棋など幅広いジャンルのイベントを企画。中国地方の文化向上とスポーツ振興を図り、地域の活性化に貢献します。



ひろしまフラワーフェスティバル

「広島と世界を結ぶ平和の花の祭典」をキャッチフレーズに1977年に誕生。5月のゴールデンウィークの3日間、開催されます。ダンスや吹奏楽のパレードや「きんさいYOSAKOI」を展開。広島市中区の平和大通りと平和記念公園は、花と人が織りなす躍動のステージでにぎわいます。



ひろしま男子駅伝

1996年にスタートした全国都道府県対抗男子駅伝競走大会。中国駅伝(福山-広島間)を前身としています。コースは平和記念公園前を発着点に、原爆ドーム(広島市中区)と厳島神社(廿日市市)の2つの世界遺産を結ぶ7区間48km。15回大会から天皇杯が授与されています。47都道府県の代表が古里の誇りを胸に、ドラマを繰り広げます。

中国文化賞など

中国5県の文化振興に大きな功績を残した人々を選び、毎年11月3日の「文化の日」に表彰します。ほかに、国内外のスポーツ大会で優秀な成績を収めた中国地方の選手・団体を顕彰する「中国スポーツ賞」や社会福祉に尽くした方々を表彰する「中国社会事業功労賞」があります。

中国新聞 アルファ

<http://www.chugoku-np.co.jp/>

『中国新聞アルファ』は、中国新聞ホームページや朝刊電子版が融合したサービスです。新聞購読者に新しい価値を、プラスαします。

■通勤、通学、空き時間…。タブレット・スマホ・ケータイで、いつでもどこでも中国新聞を読もう。

通勤・通学時間や、ちょっとした空き時間を利用して電子版を閲覧できます。「朝、ゆっくり新聞を読めなかった」ときも安心です。

■新聞購読料だけで、電子版がパソコン・タブレット・スマホで読める。

中国新聞朝刊を月ぎめ購読いただいている方は追加料金不要のスタンダードコースで、当日はもちろん、過去7日分の朝刊を多彩なデバイスで紙面そのままに読めます。中国新聞セレクトを購読いただいている方は、追加料金不要のセレクトプレミアムコースで、朝刊とセレクトの紙面イメージが両方読めます。



■+300円で、過去1年分の記事検索が使い放題。ビジネスに、就活に、論文作成に、ご活用を。

新聞購読料に月額+300円のプレミアムコース、またはウェブサービスの朝刊デジタルコース(月額3,164円)、セレクトデジタルコース(3,732円)の方なら、中国新聞に掲載した過去1年分の主な記事を検索できます。

■シェアボタンでSNSとも連携。気になった記事を友達と共有できる。

「この記事おもしろい! みんなに教えよう」。そんなときはシェアボタンでSNS(Twitter/Facebook)と共有できます。

※価格はいずれも税別です。

ちゅーピーくらぶ

中国新聞の読者を中心とした会員組織「ちゅーピーくらぶ」。2003年に発足し、会員数は59万人を超える地方紙最大の規模です。会員証=写真=を提示すると割引などの特典が受けられる加盟店は約3200店。さらに購読者だけが応募できる懸賞や参加型イベントなどが盛りだくさん。「中国新聞を取ってよかった」と読者に感じてもらえるサービスを地域で展開しています。



フェイスブックページを開設しています



あなたの「いいね!」をお待ちしています。

中国新聞のネットワーク

広島、備後(福山市)、防長(山口市)の3本社制。あなたの住む町にぴったりの紙面を作っています。



会社概要

- [創刊] 1892(明治25)年5月5日
- [資本金] 3億円
- [売上高] 233億円(2017年12月期)
- [社主・代表取締役会長] 山本 治朗
- [代表取締役社長] 岡谷 義則
- [社員数] 450人(男性372人、女性78人)

勤務・待遇

- [初任給] 247,900円(大卒22歳の基準内賃金=2017年度)
- [内訳] 基本給212,900円、厚生手当35,000円
- [諸手当] 時間外、深夜、通勤費補助など
- [昇給] 年1回(4月)
- [賞与] 年4回(7月、9月、12月、2月)
- [勤務時間] 実働7時間(拘束8時間)※職種によって時差出勤、夜勤、残業、宿直あり
- [勤務地] 広島本社、備後本社、防長本社、支社、総局、支局 ※転勤あり
- [休日・休暇] 年間116日(夏季・年末年始の特別休暇含む) 年次有給休暇は初年度10日、最高20日。育児休業・介護休業など

福利厚生

- [社宅] 東京に社宅。大阪は借り上げ方式。広島は入社3年までの社員対象に借り上げ寮制度
- [各種保険] 健康保険、厚生年金、雇用保険、労働災害保険、企業年金、財産形成貯蓄(住宅、年金、一般)制度、各種融資制度
- [社内施設] 社員食堂、診療所、歯科診療所、マッサージ室、理髪室、売店など
- [健康保険組合の事業] 鳥取県大山にリゾートマンション。広島市内のスポーツ施設と契約

関連会社・関連団体

中国印刷/中国新聞サービスセンター/中国新聞輸送/ひろでん中国新聞旅行/中国新聞文化事業社/中国新聞広告社/中国新聞企画サービス/中国新聞販売センター/ちゅーピーパーク/中国新聞情報文化センター/中国コミュニケーションネットワーク/ちゅーびCOMふれあい/中国新聞システム開発/中国即売/中国新聞福山制作センター/中国新聞広島制作センター/メイツ中国/メディア中国/ちゅーびCOMおのみち/ちゅーびCOMひろしま

中国新聞社会事業団/広島国際文化財団/ヒロシマ平和創造基金 =2017年12月現在

採用に関して

- 中国新聞ホームページ〈採用情報〉 <http://www.chugoku-np.co.jp/saiyou/>
- 経営企画局 人事総務部 ☎082(236)2241、2126



社 是

中国新聞の公器としての使命を自覚し、
会社をあげての親和協力により、その向上発展を期するとともに、
世界平和の確立、民主国家の建設、地方文化の高揚に努力する。

 **中国新聞社**

本 社 / 〒730-8677 広島市中区土橋町7番1号 082(236)2111
備後本社 / 〒720-0805 福山市御門町3丁目2番13号 084(923)1717
防長本社 / 〒753-0072 山口市大手町3-6 083(922)0451

URL <http://www.chugoku-np.co.jp/saiyou/>

